ＩＳ　インフィニット・ストラトス　迷子の猫

銀ユリヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　インフィニット・ストラトス　迷子の猫

【Ｎコード】
Ｎ２９４１Ｖ

【作者名】
銀ユリヤ

【あらすじ】
ＩＳ　インフィニットストラトス　そのうちの１体があるとある研究所の博士の目的はＩＳに相応しい操縦者？しかもそのＩＳには秘密が？

つい思いついてしまったネタなので完結できるかわかりません。もし完結するならアニメ寄りの修学旅行編までです。Ｚ．Ｏ．Ｅ　ドロレスネタが含まれています

研究所にて（前書き）

これは作者の妄想の産物です

研究所にて

俺は何にも興味を示さなかった

「ちょっと！私を代表から下すってどう言う事よ！？」

「言葉通りの意味だ。君を選んだのは他の者に比べて適正が高かっただけ。なのに現実は第一移行（ファーストシフト）すら出来ない。なら下すしかないだろ」

勉強・スポーツ・遊びもだ

「ＩＳが悪いんじゃないの！このＩＳがポンコツだから駄目なんじゃないの！？」

「ＩＳを非難する前に、自分を顧みたたらどうだ。ＩＳは繊細な存在だ。乱暴に扱っては出来る事も出来なくなる」

だからこの国の事も興味を示さなかった

「男の癖に・・・こんな横暴、国が黙ってないわよ」

「ＩＳに関して国は俺に全権を委ねた。なんと言おうと国は動かない」

だが俺にも興味を示すものがあった

「それだけかい？君のデータは有効に使わせて貰うし、今までの給金も色を乗せて出す。お帰りはあちらから」

「くぅ～・・・覚えてなさい！！」　ガツガツガツ

それがＩＳ　インフィニット・ストラトスだった

「また君のお眼鏡には適わなかったかい？」

「リーレストか・・・別に俺が気に入らなかったわけじゃない。この娘（ＩＳ）と彼女の相性が悪かっただけだ・・・この娘にも人を選ぶ権利はある」

なんでかわからない。でも引き寄せられるものがあった

「始まったよＩＳ馬鹿が・・・そんな君に朗報だ。・・・ＩＳ学園に行く気は無いかい？」

「何？どういう意味だ？」

でも最大の難関があった

「もう何百人と調べても進展なし。下手したら国中の女性を調べたのにさ。この国にいないのなら探しに行けばいい。そこでＩＳ学園だ。あそこはＩＳの未来のエリートが集まる場所。そこならもしくは・・・」

「なるほど・・・だが俺は男だぞ？」

そう、俺が男であることだった

「それは心配なくＩＳ委員会には話は通っている。これが概要ね」

「・・・・・・なるほど。これならこの国も他の国にもメリットがあるから何も問題ないな」

「でしょ？」

だから違う方向でＩＳに触れることを目指し勉強した

「いつからだ？」

「日本でいう４月からだね。それと面白い情報も掴んだよ」

そして俺はＩＳに触れる立場まで上り詰めた

「面白い情報？なんだそれ？」

「なんか男性で初めてＩＳを動かしちゃった人が出たみたいだよ。名前はイチカ・オリムラ・・・日本だと織斑一夏だね」

「『織斑』？聞いたことあるな・・・」

ＩＳには乗れない。それには興味はない

「ほら第１回モンド・グロッソの優勝者『織斑千冬』さん。その弟らしいよ」

「あぁ、なるほどな」

世の中の女尊男非そんなもの興味はない

「相変わらずＩＳにしか興味ないのね・・・」

「今の俺にはこの娘に相応しい相手を見つけてやるだけさ」

そんな俺だからこそ求めるものがある

「ふふっ。まるでお父さんみたいだね」

「お父さん？いや、俺はどっちかというと自分の欲望のままに研究するマッドサイエンティストに近いと思っているんだが？」

「いや、絶対お父さんだよ」

すべてに無関心だった俺に出来た初めての欲望

「まぁいい、準備を始める」

「準備？なんのだい？」

「決まってるだろ」

このＩＳに最適な操縦者を見つけてやるならなんだってしてやる！！

「ＩＳ学園に向かうための準備だ！」

迷子の猫は犬のお巡りさんではなく人間の博士に出会った

研究所にて（後書き）

次から原作です

彼が来た理由（前書き）

やっと原作始まるって所ですね

彼が来た理由

サイド［千冬］

「まったく委員会の決定にも悩まされる」

私はＩＳ委員会から届いた指令書を読み、目頭を抑える。
こんな要望が良く通ったものだと逆に関心する。

「それも『あの国』だからこそ出来る芸当というわけか」

それほどの発言力があると言うわけか。
そう思いながら、もう一度書類に目を向ける。特に入学する人物の名前を・・・

「まさか、あの時の子供がな・・・世の中何が起きるか分からないものだな」

サイド［一夏］

どうも、高校受験の時に間違えてＩＳを起動してしまい、このＩＳ学園に入学するはめになってしまった織斑（おりむら）　一夏（いちか）です。
ＩＳは男には動かせないという常識を破る俺は一瞬にして注目の

的になり、政府やらマスコミやらが家にまで来てノイローゼになりそうだった。親友の弾は『羨ましいぜ！俺と変われ！』なんて言ってたが、なんなら今すぐ変わってれ。俺の席は真ん中の最前列なんて場所だから、左右後ろからの視線が突き刺さるだよ！しかも小学生以来の幼馴染みである篠ノ之（しののほうき）箒には目を合わせた瞬間そっぽを向かれた。

本当ならここで机に突っ伏す所なんだが、俺は後ろを向く。窓際の最後尾の席に『彼』がいた。俺より少し黒い肌と長い髪をポニーテールの様にした黒髪。一瞬女かと思ったが、俺と同じ『男子用制服』を着てたので、彼が男だとわかった。

でも男がＩＳを起動したって話は俺以外聞いたことないけど、なんでなんだ？

「・・・くん・・・・・織斑君！」

「は、はい！」

後ろを向いていた俺は前からの声に驚きながら立ち上がった。目の前には教卓に立った、どうも着られている感が否めない童顔な眼鏡の先生がいた。少し視線をずらすと、黒板のディスプレイに『山田（やまだ）　真耶（まや）』と書いてあったのでそれが名前なんだろう。

「えっと・・・自己紹介が『あ』からはじまって今が『お』だから織斑君に自己紹介して欲しいんだけど・・・だ、駄目かな？」

いや、生徒に対してそんなに下手に出なくても・・・てか別に断る理由ないし。

「はい。いいですけど」

「ほ、本当ですか！？絶対してください！約束ですよ！！」

だからなんでそんなに必死なんですか！？約束しなくてもしますよ。こんなに下手に出る先生って珍しいんじゃないか？
さて、自己紹介となったのだが・・・後ろってか周りの女子から期待の眼差しが刺さる・・・ものすごいプレッシャーだ・・・

「お、織斑一夏です」

っう！視線から『もっと何か言え』って言葉が伝わってくる・・・って言われても他に何か言う事あるか？・・・駄目だ。ありきたりな事しか浮かばん。ここは早く切り上げるが得策だな。

「以上です！」　　ドンガラガッシャーン！

なんかコントみたいな音出しながらクラスの女子がズッコケた。しょうがないのでそのまま座ろうとしたら、

バコンッ！

「いてっ！」

誰かに頭を何かで叩かれた。俺は叩いた相手を見ようと顔を上げると、

「え！？千冬姉！？」

バコンッ！

「学校では織斑先生だ。馬鹿者」

俺を叩いた人物は俺の姉織斑千冬で、叩いた物は千冬姉が持っていた出席簿だった。出席簿って叩いたらあんな音したっけ？

その後ちふ・・・織斑先生が挨拶すると、女子が騒ぎ始めた。『本物の千冬様よ～！』とか『貴方に会いに北九州から来ました～』とかなんとかいって、織斑先生が呆れながら罵倒したら余計にヒートアップという悪循環。しかも俺が織斑先生と姉弟だと分かると『変わってほしい』とか言い出したりして、

このままＳＨＬが終わってしまうと思ったその時、

「ちょっといいか」

その声にクラス中が振り向いた。声の先にはさっきまでだんまり

だったもう一人の男子が手を上げていた。そんな彼に千冬姉が声をかける。

「何だ？」

「自己紹介云々は興味ない。だが俺には言わなくちゃいけないことがあるんでな。今のうちに言っておきたい」

「まぁいい、内容は分かっているが・・・いいぞ」

なんだ言いたい事って？ってか今の言い方、俺が頑張って自己紹介の内容を考えてたのを無残にぶった切ったよな？

「ブレジスト王国から来た、ライオネル・E・ブレジストだ」

「「「「えええぇぇぇ～～～！？」」」」

ブレジストの名前に皆驚いているが・・・って

「ブレジスト王国って何だ？」

「え！？織斑君知らないの！？」

「あの赤道付近の常夏の島」

「サファイヤブルーのビーチに山海問わず豊富且つ美味しい食材を使った3つ星料理」

「カジノでは1日で数百億を稼ぎ、ハワイ以上に1度は行ってみたい南国の島であるあの・・・」

「「「「「あのブレジスト王国を知らないの！？」」」」」

なんか怒られた。でも知らないもんは知らないからしょうがないじゃないか。中学は弾とかと遊ぶ以外は生活費稼ぐためにバイトとかしててあんまり世間の事知らないんだからよ。

「はぁ・・・言って置くが織斑。お前は一度ブレジスト王国に行ったことがあるぞ」

「え？」　「「「「「えぇ！？」」」」」

「第1回モンドグロッソで優勝した時、ＩＳの操縦者が見つからずに不参加だったブレジスト王国が、優勝の副賞として王国へのペア招待券を用意したからな。私とお前で行ったんだが・・・覚えていないのか？」

う～ん・・・どこか海外旅行に行ったって記憶があるけど、そこがブレジスト王国だったのか。
そんなことを考えていると、女子の一人が何かに気付いた。

「待って。プレジスト王国に目が移ってたけど、確か苗字が『プレジスト』って・・・」

その言葉にまた全員がまたプレジストに目を向けた。

「その事か、彼はプレジスト王の二男。第二王子のライオネル・E・プレジストだ」

「「「「「えぇぇぇぇ～!?」」」」」

「・・・む、『無関心王子』」

千冬姉の言葉にクラスのみんながまた驚いた。へぇあいつ王子だったのか。

そして誰かがつぶやいた『無関心王子』ってなんだ?露語悪いのは確かだな。

「続けていいか?俺にはＩＳの適正はないから操縦者(パイロット)ではなく技術者(カニック)としてきたと言っておこう。だが俺の本来の目的は・・・・・・逆スカウトだ」

「逆スカウト?」

「そうだ。基本ＩＳ学園はどの国家にも属さない中立の場所だ。だから学園とＩＳ委員会が決めたイベント以外国家や企業の介入は許されない。だから俺の国とＩＳ委員会は特例としてこういう約束

をした。俺の国が有しているたった一つのＩＳ、その機体を１００％やそれ以上の性能を引き出した人物の国家にそのＩＳを譲る事を」

「「「「「えぇ！？」」」」」

なんかみんな驚いてばっかだけど、ＩＳのコアって数に限りがあるからそう簡単に手放すのってできないんじゃ。しかもその国には一個しかないって言ったらなお更・・・

「この状態ではうちの国に何のメリットもない。だがその国との直通便を用意することで旅費を安くし、うちの国に行きやすくすることで浮いた金で楽しんでもらう。そうする事で経済効果を促そうという魂胆だ。これは簡単に言えばビジネスに近いな」

なるほど。旅費が安くなれば行きやすくなって観光客がもっと増えるって事か。しかも行先は一度は行ってみたいプレジスト王国。ＩＳ一個手放すだけの価値はあるって事か？

「もちろん操縦者もそれなりの待遇を用意させる。今のところ確定しているのは、操縦者の国とうちの国の移動費をタダで行き来出来るようにするくらいだ。いくらＩＳを向こうの国に譲渡するといっても研究所はうちの国だからな。操縦者が研究所にいなければ調節も出来ないからな」

ってことは何か？誰でもいいから彼の持ってきたＩＳを使えれば

それを貰えるって事か。よくわかんないけど凄そうだな。

「我という者はいつでも来い。クラス学年は問わない、だが適性がないと分かれば切り捨てる。うちのＩＳに気に入られれば一気に有名人だぞ。ちなみにこの会話はマイクを通じて学園中に放送されているからな。以上だ」

そうしてブレジストは席に座った。しばらくすると近くや遠くから悲鳴に近い声が学園中に響き渡った。

俺・・・この学園でうまくやっていけるのか？

サイド［ライオネル］

餌撒きは上々だな。後は餌を垂らして魚が食らいつくのを待つのみか・・・

釣れるのは小物か大物か、もしくは何も釣れないか・・・

絶対にお前に相応しい操縦者を見つけてやるからな

俺はこの学園の整備室に鎮座されているであろうＩＳにそう誓った。

彼が来た理由（後書き）

ちょっとご都合主義っぽく見えますが、それなりに理由をつけてみました

次回は金髪お嬢様の登場です

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2941v/

ＩＳ　インフィニット・ストラトス　迷子の猫

2011年10月9日23時05分発行